



御諧一葉集

一

中村俊定文庫

文庫 18

817

1



芭蕉翁後日附合冬車茶話俳句遺法消
息也一代之風藻雖不可忘平茲所謂親覩
於古書收藏於他庫者悉以舉焉

俳諧一葉集

前後篇九冊

東都中橋北植早

一具菴藏梓

二冊

序

俳諧者非常之而中格妙門也
世人妄謂一時戲言綺語也豈
夫然耶蓋能致知而達理之常
變氣之順逆固守自得遊心於
太虛則語默存亡無有不善故



棄名利而造之靜安可獲焉誠
意而為之身脩家整舉不外乎
此矣昔從芭蕉啟正風雲從風
靡今雖其流間有渚者沂源者
亦不少也屬者社友集錄翁一
期所嘯以為小冊以便卷懷可

謂夜行殊矣傳曰法不自顯弘
之在人湖子其人乎是為序
文政十亥歲四月

仙波僧正書于蒼筤

林中之谷神齋 同蘭

俳諧一葉集序

花や咲くふはすあらず玉性のあをきけは
 生とひけるものつねの歌をよめさうけるをや
 花や咲く人やすきと詩と枕詞もくにさつと
 あらうこそもく芭蕉庵柳青弱ハ三十阿すうは
 丁より佛頂福沙すつふと春禪しあさひさう
 花田うの蝶は枕詞の底をきく候して七情よく
 花の心をさふはくなく渾沌を語しては花を
 古人より代この弊風を轉して古今集の文の

歌子もあふ杜村の家集の稿をあてて自
事の初筆付けめし狂句千餘外の洒落を散り人
情をまじりて書し又家集に就きそまて歌子
道の神とあふれあふ其法生あふ四海にあふ
る丈とてを御も新柳郎と柳書と稱す門中
に國に千とちして其風を唱ふ人幾とていふ
数も——の志のれとて原を看て胃をあらひ
大言り通し——るおぼろのふり予斗著の量殊
り進出る生れ師友とて——くいふはひめとれ

少いひの古学流とけうて祖翁の一書とて
すまふは——る中ちとて書きとてくを
を受るやと散るよう消息迷漢のまけきとて
あつ果めて只ひとて集の一本とていふとて俳諧一
葉集と題し初るをとてされとてかれ訂
ち進る西とて非り見るとてわく村肝をきさ
みとて功り舎を道旁とつとて三年とてあふ
いふ話とていふとて友人坎富の函底とてあふ
金とて成るとてあふとてあふとて大事とて

俳諧一葉集 後句春々部

古學庵佛号 編
幻窓 湖中
坎窩 久藏 校

寛文延享天和年中

花朝の生来作久庵よりこの巻
昔白あやせき色 枕草子のそは
糸年を棚へあけてや若き心
春や人々とてわけていりて来
園原の紫とあやまらひの鏡
かひふんとついでをうり来

もく木つる思ふる年玉うる玉
於春く大哉春と云く

えのち哉

解を言ひたり於法昌宗の字枕

李吟勅進を以て

和歌の法と云ふやあやうの八重うみ
け梅子生ふと初春と云ひ包し
古より梅や難波の二年 哉
梅うやまらうおちうふ系右郎
志保一それ尾とすうぬまの弱
梅 初さう若衣うれ女うふ
杉風言ふ也

きけうう二月中旬より梅子
去年よりやうくすう行よ次郎月
初春の春へついの崩れようかうひう
春さすうく白魚やとく八浦ぬるふ
石川や解生の今中店子あはれ
歴んくく芥の飯やをて津川すう
おちうこれ青泥坊底の芥うやあはれ
千代の快くくやうおちう
あまのあまの初春あす芥の食
あまのあまの芥の飯をてて
さうく梅子すう引風さる
梅吹や白の桜木のようふあう

大風を尾ひくまゝや大さく
艶ある奴をたゞや誰かのさへ
まを—そはふとく花の風
初瀬—人くたへ—
うめ—人やさうきけ山様
花の—うめ—白きれけりて
あやめぬあけきやあやめ
ま風—吹出—あやめ—
わの花やあやめ—うめ—
ときら—うめ—あやめ—
あやめ—うめ—あやめ—
あやめ—うめ—あやめ—
あやめ—うめ—あやめ—

先初や宜竹う尺八やあやめ
あやめ—うめ—あやめ—
あやめ—うめ—あやめ—
あやめ—うめ—あやめ—

道玄の村

あやめ—うめ—あやめ—
あやめ—うめ—あやめ—
あやめ—うめ—あやめ—
あやめ—うめ—あやめ—

貞享元禄年中

あやめ—うめ—あやめ—
あやめ—うめ—あやめ—
あやめ—うめ—あやめ—
あやめ—うめ—あやめ—

山家道末

竹塔了冒雲千峰如雲のり
伊勢の雲家も木くふ代の大
嵐をく亭く西月小袖をきく
竹やう雲や似くく野のま
ちの竹はきくまんと心友のま
風無くくくえりの屋やし竹
おの尺くくく
二りくくくくくくくくく
あうや屋のくくくくくく
くくくくくくくくく
敵くくくくくくくくく

急くくくくくくくくく
こくくくくくくくくく
竹塔の雲家も木くくく
くくくくくくくくく

大津の雲のけくくく何 佛
人くくくくくくくくく
手くくくくくくくくく
えくくくくくくくくく
蓬茅くくくくくくく
くくくくくくくくく
古柳くくくくくくく
くくくくくくくくく

紅梅や尺の端をくく玉の
梅あり梅の枝をくく
山里に万葉をくく梅の
をくく

阿古久の心くくくくめ
卓代亭月待

月やちや梅のけけくく
山伏

手はくくくく梅のけけくく
梅の山に梅のけけくく
くくくくくくくくくく
ありくくくくくくくく

あきくくくくくく
て曰くくくくくく
梅のけけくくくく

あきくくくくくく
くくくくくくくく
くくくくくくくく
くくくくくくくく

くくくくくくくく
梅のけけくく

あきくくくくくく
梅のけけ

細代民新々島々をきて

梅の本子ふちやう木や梅のむ
里のふよ梅おれを生る歌

国女寺

暖簾のたぐもゆりし 少少梅

乙州と東武行候ふ

梅のこゝをすうらのたのまうけ
もややまきよこのふゆと梅
かきくまぬふきし 梅板

吉原の渡りて人のうきをいふつと守
節弱のきみとすし 梅のふ

仙葉新八とすの二月ふすしと

一箇名のけり父梅九子かすつ
ういふ

梅のふちやうけりし一字あをけりし
ふめうけりしのもちふけりし
梅のふちやうけりしのもちふけりし

かゝる梅のふちやうけりしのもちふけりし

二月吉原のけりし梅のけりし

門へ入るをきす

初午のけりし梅のけりし

梅のけりし

梅のけりし梅のけりし

九

東良河

上寺奉納

十一 那西行院

東坡先生

存原寺

旅歸子對

贈杜國

三

卷之十一

子龍

賢者の識をうけぬ

採丸子の外壁

うけさへ

同亭より旅之ける

置のくにきける

芳世うし様尺さうひの本

龍門二句

龍門の龍や上戸のちなりきん
酒のさうかむむうの酒の花
様精きくわうり玉里うす

芳世

おさうりうさうり酒のちなりけ
きうりくハ世の上さう有様

芳世村

おさうり酒のちなりけ
大和をとり御し葛城の精をさう
さうのちハ世うりハかきうり

暖のけいさういも龍ありかの神のみ

らあうり人のさうさうきけん

尺さうり酒のちなりけ

支那さうり酒のちなりけ

此うり酒のちなりけ

尾張の門人うり酒のちなりけ

活条一解おうりけを人くさ

あうり

飲あけさうりけを二外様

さうり酒のちなりけ

芳世酒のちなりけ

あうり酒のちなりけ

示門人

多し 飽より人なりん 花やみ

三浦山の雲より梅をう画し 花の深

まをちやきく おとろく 春の花

信ち 吟 鶴 ぶ

都の毛けくろふ 春や花の香

露沾るすすうて

西の 花と 雨と 花の 花

鳥の 仙 ぬ 散る 花 神さく

夕空の 文子

くや 花の 少 花 山 花

花 山

花の山ニ丁のほりぬハ大 悲 閣

まゆまう 花の 花 花

花の 花 花 花 柳 系

さく 花の 花 花 花 花

花の 花の 花の 花の

花の 花の 花の 花の 花の 花

上 花の 花の 花の 花の 花の

花の 花の 花の 花の 花の 花

花の 花の 花の 花の 花の 花

花の 花の 花の 花の 花の 花

花の 花の 花の 花の 花の 花

花の 花の 花の 花の 花の 花

静きしつちのまに静ゆふしめ

山家

朝の露より花のかたけに
おちたりけりし長しき
歌のまの光をみゆ

二尺の岡をのみ

うさぎの跡のたもとに

海子亭

残るのゆきうきと
伊賀ふいばのたもと
はき様の料のたもと
一里うきみふき

廟うきゆきと
似合ふや豆のたもと

山家

おちのたもと
木のまにけりし

酒家

田うきゆきと

山家

おちのたもと

山家

おちのたもと

上
硯
酌

海王山子信子村山嶺

古郷のうみ、國中のうみ、

中

まゝあや二枚うりもえゝおかし
けいふも思ひふかしうらなほ

茅種や花の如く千変万化

木白無心

[illegible]

依欠勁岸寺

系初年 依足所規の常を

燈ハ餅ヲ喰フ柳ノ下ニ

尚白と浪華へ下る

只一夜
柳千
石之
木
幡之
凡

吉寺の柳をみるもよし

舟安もやうむ討あう 溪の枕

さうして、おのやまのふもと

もてうさへおまむりなれハ

頃住る處をおきぬ人々

如ぬけ人なる事を具しむるに

持人等之

子バも位知る代り辭の

重三

青板石泥平志以干也

おとろくや馬ふなあてし海苔の砂

おぼろ

振ううハ海苔をハおぼろをう

海苔子里ハ海苔

海苔け。おぼろをうハ海苔を

あけりや白濁をうハ一寸

常陸下向ハ海苔をうハ一寸

海苔をうハ海苔をうハ一寸

坂子園

あううもや黒ふ同をうハ一寸

うー野をうハ一寸

飯貝や海苔をうハ一寸

古酒や海苔をうハ一寸

海苔をうハ海苔をうハ一寸

海苔をうハ海苔をうハ一寸

田家

麦をうハ海苔をうハ一寸

海苔の意ハ海苔をうハ一寸

海苔の意ハ海苔をうハ一寸

海苔の意ハ海苔をうハ一寸

海苔の意ハ海苔をうハ一寸

悼呂丸

海苔の意ハ海苔をうハ一寸

海苔の意ハ海苔をうハ一寸

圓角廟の漢を重む

お暇とすゝゝゝおまゐりひれ
せき提山

山寺の山——と昔よゆえに
松ののり利の接種や山屏き
茶店二句

は——いけりやうけり干體さく女
茶とけりやうけりやうけりやうけり
陳菴の信宗波旅子起れりや
古茶只あられりやうけりやうけり
系中やおろりやうけりやうけり
ふりやうけりやうけりやうけり

お暇とすゝゝゝおまゐりひれ
せき提山

父母のききりやうけりやうけり
地やうけりやうけりやうけり
地やうけりやうけりやうけり
夜子とあられりやうけりやうけり

茶子画賛

もろりやうけりやうけりやうけり
物ふやうけりやうけりやうけり

下木亭

地やうけりやうけりやうけり

十一

襦
乙
カ
カ
エ
シ
ハ
フ

あつしにふふあふのね

山吹や字酒の情懷の妙なりと云ふ
山吹や字酒の情懷の妙なりと云ふ

大和の御少時丹波市と云ふ
 而して其のくしをくしと云ふ
 其のくしをくしと云ふ

子外
之
言
の
い
ふ
や
う
な
に

昔如之小四合之小
峰入や一里如之小
山

此節に於ける茅舎の画

卷之五

二葉軒

教 門 之 爲 の 事 々 々

逢就尚舍

物の心をえとふ秋のわが恋
ゆく雲と秋の海と追付く
るを

行春やきりぎりすのうた

田家子吉の字を成

入あは寝るまゝのうらなふれ
寝つゝぬ里を何とぞとふのそ
聖湖水傍を
ゆくまゝをほの人とまゝなる

春體

しら通る陳の梅をあらゆ

自画自賛

あかきう成りてはのまのま
えらやあまのこころの秋のうら
四つうさせぬまゝのうらなふれ
勢ひもまゝおきえとて海津急

止妙の舞

花うさめ 御織まゝにけられ指さす女
孤名うみられけりをまゝ

むく起る海のおはめあひのそ
阻り和尚を悼

咲もあられぬうらなふれ
袖もさういふ回廊の雲をひらきまゝ
まゝくまゝに寝るまゝのうらなふれ

梅部

[illegible]

君や陳香や
 那波のや
 香子う
 香く
 佛頂
 福跡の
 小虎
 も

るるるるるる 棚きす 花の葉

散句夏之部

寬文延寶丁卯年

時やあけ年のすゝめある候に
 時をさめく可敷けむ尾花
 口すゑも油月夜にむす
 戸のひかりふれふれ耶
 黒焼釜をうつて炊くは
 志けり可きや
 子規西月を梅乃花さる
 清くみむ再り香煙を
 完結しし海を海や
 芳前生るは
 福祿

小瓶の中へ

いりあつて川うねの下の下す

不トの母道署

あちけと泣きいふそりあき

甲斐の町内とあきとあきとあき

あき略

あきふくし我を泣きあきふくし

貞子と縁手巾

ひりあきふくしあきふくしあきふくし

あきふくしあきふくしあきふくし

あきふくし

浄佛のあきふくしあきふくしあきふくし

滑仏やあきふくしあきふくしあきふくし

あき略

あきふくしあきふくしあきふくし

日光山

あきふくしあきふくしあきふくし

あき略

あきふくしあきふくしあきふくし

あきふくしあきふくしあきふくし

甲斐山中

あきふくしあきふくしあきふくし

あきふくしあきふくしあきふくし

青竹―やま解の種も出つゝあ

通案門

いさゝか子種もあつゝあ枕
五月十六武府もあつゝあ
みく川崎もあつゝあ
白きふきつゝ―

麦の種もあつゝあ
麦の種もあつゝあ

悼大巖和尚

梅もあつゝあ

廿四ノ母五七の追慕

卯のふくもあつゝあ

いさゝかやあつゝあ

尾張―東武下つ時

牡丹茶漬もあつゝあ

枕陳新也自画自賛

空―あやあつゝあ

大坂―

あつゝあ

山崎宗鑑もあつゝあ

あつゝあ

あつゝあ

あつゝあ

鳴海知見亭

うむつゝ我に霞のむらさき
帰春

多ふ衣のうへに風をこゝろに
こゝろとやまをさけくふ羽織
大垣の鶴と書 日光寺代家勲と
ふふと虎從ふと家田や何葉と書
藤の家藤とけしし藤とけし
鼠とけし藤とけしや風とけし
波塵

江戸さういふ歌のうたきく木下書
雪片と
木つぎと虎は破るはる木と

幻仙院

先ふのむ様の木とありうと木と
別旧友

二つとてうとてうとてうとてうとて
子規とてうとてうとてうとて
楊やうとてうとてうとてうとて

浮きとてうとてうとてうとて
江戸の海とてうとてうとてうとて
江戸の海とてうとてうとてうとて

時とてうとてうとてうとて
みちとて一尺の葉門同く三人形

おとろもあつてあけぬ石尺
むいさやけりほいりあつた
先づあつてあつた

昔来りや字久のたれは
那次也

世を積るるいおわけよ郭一
けりあつて積るあやうり上
一巻の江戸積るあや社字
あつてあつたや時
時

わさきす大竹敷もあつた
けりあつたや五尺のあや

さし竿あつた
あつた竿やあけぬは
仙基

田やまや中もあつた
あけぬのやあつた
不一周忌あつた

あつたあつたあつた
木はあつたあつた
鳥はあつたあつた
すのあつたあつた

あつたあつたあつた

三十一

標本植物之全

贈杜國

次磨

岱水亭

芳林

冀州府志

早苗も我も夏より秋まで

めらあうきまうにやうてふうてふ

此百川也

學齋等子の芳名を卯の陽關に

如之故人之薄也

風体のくめやたくの河植吾

志の歌思の里とや又言柳の若枝

とて方二ちとてうす石を此石ハ普女の

卷之六

二十

屋張の旧文を對す

荒田の亭

その成を考へて飛出

瀬田のさくら

ふちの海をくぐりぬ

上林三入亭

秋の城をのぼりて

芳名をかくる人の名は業家なり
 ありや

310

三十八

作之本旨涉乎赴之方

うや人の如くもあつく本居の境
於のちとくはくも似よ本居の船

服部山家

望之 みる くの 影 せう せう

清風亭

大いむよかひ屋うふのしるしの書
井のまや移ふ時お終のまきり
小鈴壺より

果の人のふりやふり

甲山脈の源を乞ふ

黄多や新の字数手考を

木園亭竹畔

陽春と牛乳をみるゝ

紡
織
者

孝人乃尺付ぬ花や新の森
 又らえむ小瓶の中にとりし松魚
 ういをもとえいつあう人を磯よりむ
 預金とていさしむきん袖に色
 やみの花や常もわたりてふりあふ
 走つ川を信何之をまつのをきけり
 年をいれぬとてふ歌よとてふ

大德年

二十七日

所や久し是に能く能く難の能

病中自序

武隈川の水邊に

醫王寺

孝行ハミコトニシテ

望一川に五月のめづる花

ゆきふり

さけふの陣 陣 一わき

もみ川

五月のめづる花 一わき

風のまもる花 一わき

りのそやめ 一わき

信濃の流る

入梅の流る 一わき

信濃の流る

さけふの陣 一わき

五月のめづる花 一わき

お川くす

さけふの陣 一わき

五月のめづる花 一わき

風のまもる花 一わき

りのそやめ 一わき

信濃の流る

入梅の流る 一わき

さけふの陣 一わき

五月のめづる花 一わき

風のまもる花 一わき

りのそやめ 一わき

信濃の流る

夏山や秋山夕々し一里 経
夏山や秋山夕々し一里 経
夏山や秋山夕々し一里 経

子珊亭
子珊亭
子珊亭

重行亭
重行亭
重行亭

正成之像
正成之像
正成之像

石心以人之情
石心以人之情
石心以人之情

鐵肝
鐵肝
鐵肝

鐵肝
鐵肝
鐵肝

鐵肝
鐵肝
鐵肝

鐵肝
鐵肝
鐵肝

鐵肝
鐵肝
鐵肝

鐵肝
鐵肝
鐵肝

鐵肝
鐵肝
鐵肝

鐵肝
鐵肝
鐵肝

やうきむねの枝にあらはれし
 首のめし終るものなり
 こそは悔み
 もろき人なりけむ
 秋の人も志をくはる
 うき世をさひけり
 秋の枝に我をまかり
 輪の山に
 持てけりけり
 立石寺
 志のやうき人なり
 寺の山に

やうきむねの枝にあらはれし
 首のめし終るものなり
 こそは悔み
 もろき人なりけむ
 秋の人も志をくはる
 うき世をさひけり
 秋の枝に我をまかり
 輪の山に
 持てけりけり
 立石寺
 志のやうき人なり
 寺の山に

乃の和や酸く瓜むすむの孔
ゆふあす千瓢あひて遊ひく
任る人のあやうに終る昔生まけ
る古法を訪る

瓜の味もあはれなれどもみ
河津松波あはれむす瓜の
花をいけり下は雪の降る
く花生るる雪を播く
瓜の味もあはれなれども
昔の味もあはれなれども
ゆふあす千瓢あひて遊ひく
任る人のあやうに終る昔生まけ
る古法を訪る

山にけやあはれなれども
花の味もあはれなれども
瓜の味もあはれなれども
ゆふあす千瓢あひて遊ひく
任る人のあやうに終る昔生まけ
る古法を訪る

夏の夜や崩れてゆく冷し物
さしに端をくひのほろ清き如

岐阜山より

城跡や古井の清き水
那次の温泉の神を宿る八幡宮
近きなりて東都一方にあり

湯を流すちのひと月し清き
弦をうたへや笛をひくさるる如

次広二首

月をくくち物くくちや清き
月をくくち物くくちや清き
月をくくち物くくちや清き

明石松伯

情意やさうふさふさなる月
多きやふさふさなる月
夏の夜やこころの清き如
夏の月清き如き如き如き

晋の洞明をうたふ

夏よりにはるや洞の清き如き

秋の夜よりにはるや洞の清き如き

山よりにはるや洞の清き如き

井の夜よりにはるや洞の清き如き

夏の夜や洞の清き如き
夏の夜や洞の清き如き
夏の夜や洞の清き如き

三十一

家名を稱し

いづれとわくる處や雪の峰
雪よふふと月をみまはるや西の鼻
枝ありて雪うらうらぬ雪さうさ
雪のふゆいとみぬれと月の山
ふゆや峰や雪なく所り山

有月や鯛はほほえましく
 清洲や浪はあはれなる
 みふりや少く病やみの思ふ
 かきや舟ぬる旅のゆく
 松風の葉はあはれなる

石川丈山の像

風
之
初
ハ
標
々
々
々
々

并 常ハ之トカミヲ新酒外
小倉山常寂寺ニ

松林もふとや風の薫る方
遊力亭 二巻

卷之六

さるみや風のまじりぬお拍子
湖やみりさをも惜むやう少峰
蛤の口を欠けしる若う雨
破れけりや新や新くみすみ
風瀑録ふ

わすれすに少ねの中いさす先
ふもあやうくもあやみのふ
うき木の方下つりけり
あふ人の袖もいさや去月干
十八操記

はあしう月をふゆあふれ涼し
清風亭

涼しさをあやにけり新あし
四時とあつちやみのあやみ
羽黒山

うあしやあやもあやう南谷
すしやあやのさう月け羽黒山
文鏡子あふの像をもあやけり
あふ佛もあやもあやう
新あや風亭

あふのれくお宝あや柳あれ
袖の海のあや
あつみ山や吹海うけうあす
寺を国あや亭

野水新書

岸にさき移國を欠けの住ひの國

東武より上りて人の子計り

東武の毛腰より一處をみ

野水亭

海にさき移國を欠けの住ひの國

東武より上りて人の子計り

大津木節亭より

秋らふやうに海のようや回る事

春體

安原傳出換

みえろやれやれししの住ひの國

長貞亭

海にさき移國を欠けの住ひの國

松島

多しやふくやうにやれやれ

松島やふくやうにやれやれ

野水亭

海にさき移國を欠けの住ひの國

春心の時

春ハち終る里一海の時終る花

秋虫横 柳を吹く風は 涼しい 秋
ちやいさ 秋の風は 涼しい

さみしき 秋の風は 涼しい 秋
李青く 秋の風は 涼しい 秋

秋の風は 涼しい 秋
秋の風は 涼しい 秋
秋の風は 涼しい 秋

秋の風は 涼しい 秋

昔の秋の歌

寛文通 寛文和 年中

秋の風は 涼しい 秋

秋の風は 涼しい 秋

秋の風は 涼しい 秋

秋の風は 涼しい 秋

秋の風は 涼しい 秋

秋の風は 涼しい 秋

秋の風は 涼しい 秋

秋の風は 涼しい 秋

秋の風は 涼しい 秋

秋の風は 涼しい 秋

唐桑や軒端の萩の取らる
重陽

さうつゝやれにゆく菊や朽木を
近江路を通うけはれぬ秋の道
くし散らさるるものよよのきぬ
けし

利きくさるるものきぬのきぬ

貞享元禄年中

阿波郡守

初秋や海も青田の一みとく

くつ秋やにぬきさるるは萩帳の萩

直にけし

久月やさるるきぬ秋やにぬき

阿波郡守

萩海や秋やにぬきさるるは萩の川

合歌の本にぬきさるるは萩の川

貞享の母七十あるきぬの秋七月

七なすてきぬさるるは萩の川

題とく是きつゝさるるは萩の川

きぬさるるは萩の川

七株の萩のきぬさるるは萩の川

何うか萩代なり随きぬさるるは萩の川

くみ

七夕やとるゝの現世係施

吊雨星

言水や一ほりや龍宮や岩の上

神童亭より

七夕や秋もささむるゝめのか

富麻寺より

僧おのゝいゝ死をゝはりの松

おのゝほのいゝくゝやあゝ坂の端より

鼠をゝ画や鏡をみゝ行は

おのゝえゝいゝのきゝゝあゝれゝゝ

更科のきゝゝ

葉を海よりゝゝぬけゝゝうみ

閉關

あさゝほや雪を預めゝうみの垣

おのゝやゝけゝゝあゝ友ゝゝけ

和女角巻巻句

おのゝほやあゝめゝゝあゝをゝゝけ

九宮のてあゝをゝめゝ時をほのけ枝を

そゝてゝめゝ

おのゝゝ扇をさゝくゝゝれゝれ

あゝあゝいゝあゝあゝあゝ

秋涼ゝゝあゝあゝけや瓜あゝ

桑畑のてゝゝ秋風の心

ひやくと解をふかへて金おひ

家李い

稲妻をふくくやみの秋相外

言数加

阿けやま稲妻をわいけうけ

成知識のけこまてふん稲大蛇基

とつやいふまててて

いれつるう怪ぬ人のたやま

稲妻や言のかゆく五位のや

お万まぶつおや稲骨ともの満然をか

まて能するおを画て其其のぬる

いけうまに生家のほろわれぬ

はねのうとてあやかの稲妻を

枕とてぬきあつてそわてぬ

も品は生おをまてうもの

のふあわうたのおぶすまの稲

すや西のたう

あくとく試すはをすうとや

画機

ありの字難とうれねのふ

言良うふ

うみうわ書けきむまのた

二尺の海

現うと拾ふやうほふ石のつ

四十五
常備をく可達茶方丈八心の代り
すのゆゑに士降代を掛て奈天をお
さる日月の影を雲門をひくくありむ
うふやこれおもしろく美奈もあす
詩人句をぬきす才文人もそをけ
画も筆を捨てけし中貌姑射
此巧の非人ゆゑ其詩をよくむ
其画をよくむ

やむ方け時百奈を中ぬく
霧みぬ不二を尺ぬきおるく
秋海棠西風の吹くく
玉川のふくおるく

ひよりくくく
くすく何の像

むくも背すくく
天上の吟

是くく木様をすく

言田醫師細川青虎亭

葉樹くくく
枕

加賀屋入

ふ編のまやをけ入

少ねくく

ききやおねく

秋多や一夜をや山のみ

観水亭

終の演

ぬれくゆく人をわづや市の秋
浪のすや小貝やすくす秋のち
いろの演

画襖

小秋ちきすくけの小いふささき
あゝあをこわさぬ秋のくわ
ひのあや遊女とあやう秋と月
あを言ひ子の庭あはれ
人々

風いらや志とるす桂庭の秋

敷賀寺宗院

門より入ハ庭路よりあはれひうれ
悦事お向の庭室やうの秋

あをあやあはれあやう外
茶店

遊女の画襖

枝よりあはれうううあはれあはれ
きり市のあはれあはれあはれあはれ
あはれうううあはれあはれあはれ
けきりあはれあはれあはれあはれ
秋草茶

そほそし角力取子の花乃家
侍衆け斗從ふ山を計まこ
夢をまハきいひてしるふ山は
三月の月を花よりし夢をまのふ
お思の方をまの秋ををがす
よふおやを花よりしお背戸の栗
初秋中一日はまの遊てき瓢を白
きうはや秋をいひて瓢を南
かかふをこさ
熊坂の山よりや川の玉を
る山
玉をふりくふて校場のくさう
り

凡そ負ふまをうりてお
花よりぬおを花よりし玉を
花よりやをて花よりし玉を
甲戌の秋大御を侍りしをこのふ
許より消息を花よりしをこのふ
命をいひてお
家より花より白を花よりし
骸骨の骸
夕風やを花よりしを花よりし
おしきけ花よりしを花よりし
許より画を
晴角力いひて上より米の食

夜よりけんとし句を、夢をみる
つめの絵手

秋のいろぬの味香をきく
志のうきや結つてつる
冬にさす宵やみとくし
床よりきくいひふ入
新ねしを習すむき
左側の神社

むきんやぬかやのふき
白梨ぬく秋の口や
きびしきや新け
その戸をうに位
秋の風

けあつたれ友とあつた

みの法けきき
晴蛉や取つて
秋の葉
光のきき

田中のけきき
新法やふ
田家

かろけ
板のきき
田家酒家

桐のきき

智の目もやや言ぬとて
 稿すゝも草の木をけや
 青くてもろくふもの色
 かくさぬそやも業計の
 大風はあゝも新し
 木曾塚の旧草は在る
 子の戸をきれや
 柳陰軒を
 金呂を
 庭掃くもや
 画賛

龍溪や原の草の時
 望田を
 病はけや
 海すの草は
 月を
 奈良を
 いひ
 何れか
 柳の竹葉
 栗穉

五
一
一

五
一
一

五
一
一

五
一
一

五
一
一

五
一
一

五
一
一

五十一

卷八

李汝明作

敦
賀
夜
泊

名月如金日如金
侯

月のみるやうな角力もあつた
仲秋の夜つきの月が如く
うきうきと海を渡る波の如く
玉のやうな月を手にするやうな

天下才子當有引楊家之筆者矣

月弓之豫乞之門海の底

木因亭

陸
 家
 や
 内
 と
 菊
 と
 田
 三
 反

斜
處
亭

戸を清けいざ山阿伊吹入と云花
々もうゝ清雪もよきは只是孤山
の清阿

手すしに月も花のまゝ 伊勢山
伊勢山又玄くおやとてめしれ侍るころ
手あめ男のやうにけしき物あまたなり

尺一々燈の影をさぐりてはぬかりの
ちの妻を切る床をさけけし
心ちや今更丁か

月さひよのちの妻は影をさぬ
悔を流て空は下

其雲を羽是るうをけの月
片月をぬくうくも瀬田の月
通題

まうけく月をさぬは影の
お出の影

月さひよのちの妻は影をさぬ
既や賦

預めく月さ入よは佛米
安くとわきういさふ月め

正安寺初會
月代や勝るを玉育や

古寺觀月
月尺さる月さるき無と

月尺の能
米く友をさひは月の家

義仲寺
三升さる月さるやふの月

月月やゆめさるふ七小町
月月や火さるぬきのか

川と此川にや月の友
いさふひえりつる園のさめり

嵐蘭初七日消暮

尺一やそさうりさきめニりの月

東照傳

入月の法をれめ四隅うき

感水亭

新待や菊のあはする豆腐串

竹架の山中

名月の花うき尺一縁うけ

名月と林のまわり田の田舎

義忠庵

くさ月誰より燈の月と十の田

信吉の市

非買くかふあはる月尺二れ

畦止亭題月下送児

月すむや花柳うき吹の秋

甘柳亭

秋とわさつとあき月の秋

名月や池をめぐりておとす

山室と心め庭やあけの月

わさかきと花角れ秋をささの月

かけとや先思ひいらぬむく

機や心のうきさうむきう

芳野於泊

堪ふく高き木をよや坊りつ月
 亭にさす小斗よりく堪うれ
 晴しやハ藤井小袖をきぬこけ
 子里より旧里より

孫弓や習志の船心竹のたぐ
鷹牧亭

夢のやめなきはまきもあつゝ
 夢のやめなきはまきもあつゝ
 夢のやめなきはまきもあつゝ
 夢のやめなきはまきもあつゝ

海廟寺を殊々まのふに留め、思ふふ
 母の白髪とこわのみを

多しとくハ清ん流るる所の、木枯の露
 初葺やまゝなり敷経ぬ秋のつゆ
 松けけやゝゝぬ木葉の風そく付
 松葺やかたれとてハ松の影
 葺けやあふふいろく又時雨
 窓水ふ替へ

義うけり木の邊りその家拾りや
 木の下の櫓うき夢の人け出さうれ
 李内と木の二人

世の薬と柳とを
ききの説

に野を翠亭

里よりく枝の木枝ぬかきふ
まふ柿や一口ハ喰ふ猿のつゝ
望田素浪可休亭

祖父と親を子け屋や枝みん
柿や侍ぢぬ白子の店きし
何喰ふ小家ハ秋の枝つけ
秋を孫守陸くふ久くや菊の家

草薙の西

起ぬるる菊ののうしめはこ
た枝亭とし

ちやくさりぬるらうー 木の玉也

蓮池のうさ相まこい菊をちうき
龍山の雲をひくきりふえ千海は
鶴ねをすあくわねなすれ
とまう枝やふぬ手淫のすや
あゝあゝと哉

つゝいひのう枝のう枝のう

山中の温泉

山中や温泉をたきぬ湯のふい

ぬれ亭

渡ふのうさふ菊のつちみん
るあのかたてひくハぬのこい
田かき食

城も末に破れぬを以て菊の輪の菊
 九月九日乙卯の標を携へて來りてハ
 その戸やうき多うくはに菊の酒
 尺のやうなけやのうきふの後の葉
 ハ丁堀りて
 菊の葉や石屋の石の百
 大門通をふりて

琴の古抱店の背戸の意は
國女亭といふ

ありきくは月々之て人を驚かし
 奈良とし二万

菊の香やなほ良うと云ふ佛を
まぐももらやなほ良うと代の男
うゝの香を味うし

生玉をよみとく

菊の花の歌

おしハ 酉ノちる事ゆさるや

秋十とを却ては物をさす古心
懐於子

懷於子

秋風をみ人かきあけし秋の風
 義のふりあけし秋の風
 秋風や藪もさけも不破の山
 ありあけし大根ありし秋の風
 一笑追善

一笑追尋

墳々々々々々々々々々
秋の風

連中

赤しとろろつれあふも社の外

牛乳屋の故の者、福一、秋の御
那言歌一首

新書

石山のふりて
志ろく
種風

贈
桃
矢
号

秋の風
 の木々を染めて
 中村をこく

秋の月 伴なはるる 糸の 珠
 珠の 吹くも 糸の 珠
 中々の 珠

中
右
張

ものゝ唇さうし
あまの風
あまの音きこえ

音秋の聲

秋風や桐子くも
以て夢の如

伊勢紀行の跋

西 東 あそびのさかき 秋の風

悼松倉龍葉

秋の風を吹くや 木葉の枝

野水に流るるを思ふ

尺送るれいりやさびし 秋の風

曲翠亭題秋意

乳麴のふき 暮るる秋意を思ふ

麻呂神前

此 ねの 実 生 きて ばや 神の 秋

留る

あつと おろつ 果は 木葉の 秋

さうさ 秋よ 時ちね ひとし 秋

種のはな

さびし かな けふは 秋の 秋

外伝巻

秋 病や 病の 秋 秋の 山

小島木浮桐実無り

秋の 風を 吹くや 木葉の 小松川

秋意

此 秋の 風を 吹くや 木葉の 車窓亭

車窓亭

秋の 風を 吹くや 木葉の 秋の 山

あつと おろつ 果は 木葉の 秋

やうう人し青木箱のやう朝起い
やう

やうう人し青木箱のやう朝起い
本因寺より

死をもぬ旅の宿のまゝ秋のくれ
いづ秋のくれをうて明きまかれう

深川の庵

夢郎の庵をうて秋のくれ
枯枝の影のまゝ秋のくれ

雲竹の像

こらうむけあもさうき秋の
所恩

此是やゆく人しに秋のくれ
り秋のくれをうて秋のくれ
哈れあもさうき秋のくれ
内おはるをうて秋のくれ

をうみけうて

秋のくれをうて秋のくれ
ゆく秋のくれをうて秋のくれ
き柏亭より

秋のくれをうて秋のくれ

清いこのまゝ秋のくれ

秋のくれをうて秋のくれ
り秋のくれをうて秋のくれ

考證

悼仙風

子向く井ハ量り 細くとも
 海長光系その子 子めきり
 付くとも葬り

竹石

何より、もとのふとくしうを、
式部卿の月の居生や 松島の 橋
又うづりやふとくしう、
す 燈籠の 虎

現況小部をいかに
 一草菴の席上郷食を
 了るをいかに
 就の終

米のふふけを瓢箪を乃きど
あのきりけ床中も入やきうくけ
等我の君のひき
名力の尺をさうん
今米をさうひき

世の中を編みたるものなり
 能く其の心を知るものなり
 舟の如く其の中へ行くものなり

あやうお

さひさきとてふれぬう桐一葉
夕月や初も候ききぬいふ
秋のく候きき亭なる中
はは井伊家の邸に海を渡る
侍ちのふし家より信てかれの
を待つちの候きき亭なる中
よのふし候きき亭なる中

あやうお

あやうお

内の子もあやうお
ゆきやあやうお

戸田村

いふれ候きき亭なる中
大吹竹もあやうお
むつ時あやうお

深川

梅のあやうお

つゝ知るゝやまのふいこゝふとけ
負山は倉をみちりてありき

茅舎買水

冰若く偃氣、岫をくく浮き
小舟をやち習ふ人の居るを
境よりともなふにむねを

龍安寺

山よりふくかたむけをす
白炭やかの浦島、志の

張望の況

きりふくまゝに家路がすく
をのりてくはるにききり

浪のちとさやふく、
くくを相傳を國の葉に

耕月亭

ききり上戸は鳥やいれ
時あそやふく、
つゝきす、
玉露を何とくも

おとくれなる人の汗

ききりやふく、
室の路や咽、
ききり、
ききり、
みちゆく名所の内指

山々猫賊うさゝやきうのひ
ちうのひや露沙の羽ありき
瓶を八寸一黒天とちを尺とあふ
きり牛満地くさるやむ
ゆきの釣ひくす鮭をかみえり

各所八体の内

松島や雪かき地のなへへ
子代をうす天のてんけうあき
ふされ子業飯手つまむす
此うす能あうす手は徒あ
乾鮭や何う一屋も毛は人
あうすうなうすううさうすのう

一休くち念うさうむくーのいあ

貞享元禄年中

元禄辛酉初冬九日某菊園に
きりふの宮を神宮月うさうけ
けうてハ其頃公卿のあきみや
菊をひくす時神宮のきりやう
且ハ展幸陽のたけあきうも
秋菊を詠う人へさすあ
れうさうあうね

菊のうやなうきれう屋の底

桐葉のめしを海うさうられ志はく

とふくあやきしほに

け海子し子難けん空時雨

そのけしうし時雨をひく

空ともふあきしうさうさうさう

空状大もしうさうさうさう

時雨ゆくや舟の帆張子取け

難けあきしう時雨を生る

人の海しうさうさうさう

さう時雨けのうさうさうさう

とやこふしうさうさうさう

らうやうさうさうさうさう

るたしきうさうさうさう

旅人ともあきしうさうさう

一尾ねえきしうさうさう

伊賀山

時雨けのうさうさうさう

四里のうさう

志くしうさうさうさう

美濃雲升言難けん時雨

け木け座をいさめ時雨

さうさうさうさう

言しうさうさうさう

るすしうさうさう

好六亭

いふこと人々もきくはるる時
新種のお柳とてやきしとれに
山崎の井出のきくしとれに
きく

人しを時あふるるきくしとれ

支那亭

口切り堀のきくしとれに
鶴一子やたきしとれに
きく

越前亭

きくしとれに
きくしとれに
きくしとれに

口切り堀のきくしとれに
鶴一子やたきしとれに
きくしとれに
きくしとれに
きくしとれに

大根亭

口切り堀のきくしとれに
鶴一子やたきしとれに
きくしとれに
きくしとれに
きくしとれに

大根亭

口切り堀のきくしとれに
鶴一子やたきしとれに
きくしとれに
きくしとれに
きくしとれに

口切り堀のきくしとれに
鶴一子やたきしとれに
きくしとれに
きくしとれに
きくしとれに

狂言の〜狂言の〜狂言の〜

竹の画賛

[illegible]

本枯子句也

三河新郷の家士若原權三郎

事々
終る式ありや否に

鳳來寺子名記

風子岩山松
松石

多段の櫓をとり

電人よ我々をちよと最繁川
 爲まのり所れと神の最繁川
 大通院金毛石上芳名をゆふこと
 久きうちにまみえん事と知
 一に強きとわとわに神の一
 初めをきぬふとわ一久に

あふめいふきき

母かゝら尺さや枯木の枝の長

大津をこる

三尺れふもゆゝ一ふ木もふれ

月の海にきこゝるぬきもは松の心

をさすわーこ

そこの海や海をふもみから

中寺の寺園の地をこつてふれこゝ

既へ百年の相ふふとのや海を奉

加の解よ曰竹樹のふもふ石をふ

とふふに木を物ふふと殊勝ふ

受けふふれハ

百手はきききききききききき

きききききききききききききき

きききききききききききききき

きききききききききききききき

消息

海を海や海のやゝれ海五外

付字奉

きききききききききききききき

きききききききききききききき

きききききききききききききき

昭酒堂

海をの海をこふふふふふふ一匹

早の端のふみをおそれよふうも
ふみううふみう

あふふふや田螺のふみううも

樽七うあふ

田里を去るふみうう田里を去る
ふみうあふ家僕何可水木のふみ
あふを去るふみうあふを去る
奴阿段の功をふみうあふ陶侃の功
をふみうあふ陶侃の功をふみうあふ
物にふみうあふ陶侃の功をふみうあふ
上智の人ふみうあふ陶侃の功をふみうあふ
ふみうあふ陶侃の功をふみうあふ

ふみうあふ

先従く梅をうう海のふみうあふ

ふみうあふ

あふふ伊吹をうう海のふみうあふ

防川あふ

あふを去る梅をうう海のふみうあふ

あふを去る梅をうう海のふみうあふ

あふを去る梅をうう海のふみうあふ

あふを去る梅をうう海のふみうあふ

あふを去る梅をうう海のふみうあふ

あふを去る梅をうう海のふみうあふ

あふを去る梅をうう海のふみうあふ

世十一
此里をほひふふとてやう院の
門の参るもあはれなりとてほ
美らうとて里人のかたけをもと
けたりとてあはれとてほひ
ともやうとておほえたりとて
梅にふれふほわふふほひの里
あうとて花入梅枝梅枝とて
そとふや新緑のうとてほひ
河下の茶店
松葉を焚くも枝のやうな
古田の静
宮うらわとて二人ぬきほのき

孫やわき入りの新さふき
三河ふ風来寺の消るるのまじり
れあひあつてふふとてあはれ
ねえひとて新やうとて梅枝
李の妻の悼
うけきとて梅枝やうとてあはれ
え起和尚も酒を酌する
ちやう
あやうとて酒入りのかたけ
仙化の父の追善
神のうらうとてあはれ
梅枝の園茶とてあはれ
魚の店

葛白くはひまゝなるまゝなりけ

燕園うし

海苔の影のあはれのうし白

葉名古を海苔うし

久牡丹よるよるまゝおほくまゝ
一ひまのうし白なるまゝ川を

新さぬハ 牡丹の里 呼陵を

花のうし 花さる 花の降

星崎お園をんまゝわらふまゝ

杜園をけひるまゝすう

庭のうし 尺けくまゝけくまゝ

魁のうし けくまゝめくまゝ 鴨の足

杜園不幸を伝ふ古語をうし

花のうしをわらふまゝ

花のうしをわらふまゝのうし

花のうしをわらふまゝ

すゝみゆくわらふまゝわらふまゝ

生あうまゝわらふまゝ海苔のうし

花のうしをわらふまゝ山名集

花のうしをわらふまゝ

一花のうしをわらふまゝ

花のうしをわらふまゝ

瓶のうしをわらふまゝ

十二月のうしをわらふまゝ

幼きわきのくひをさきうけ
曾良何うハ何う進くか
屋もトモ物もあつと云ふ
赤くひ物いふはききり
にすけとあつと云ふはききり
肝もよく性良きと云ふ人
中もよくと云ふはききり
汗汗
君火をくけと云ふはききり
物もあつと云ふはききり
抱月書
市人より見たる文の
きり

夢一り一ききり
杜あきり中もききり
取はく
ききり
松川八重の
米のいり
寒山自画
庭掃り

閑居箴

酒の飲みいゝし、神のまじふもの

時局難言亭より

京やういふいふやうやうの

熱田湯治書

度直し、張も、清も、雪の

古寺の境、おもしろい、越人の

二人、尺、雪、り、も、

懐徳堂

雪、おや、雪、雪、の、雪、の、

い、い、い、い、い、い、い、い、

い、い、い、い、い、い、い、い、

雪、の、雪、の、雪、の、雪、の、

元、元、元、元、元、元、元、元、

雪、雪、雪、雪、雪、雪、雪、雪、

雪、雪、雪、雪、雪、雪、雪、雪、

雪、雪、雪、雪、雪、雪、雪、雪、

雪、雪、雪、雪、雪、雪、雪、雪、

雪、雪、雪、雪、雪、雪、雪、雪、

雪、雪、雪、雪、雪、雪、雪、雪、

雪、雪、雪、雪、雪、雪、雪、雪、

雪、雪、雪、雪、雪、雪、雪、雪、

雪、雪、雪、雪、雪、雪、雪、雪、

雪、雪、雪、雪、雪、雪、雪、雪、

大雪や降りいとし 住敷の家
三秋も 経る 深川の畔 庵の 隅きれは
旧友門人 多くに 都る 末の ひと
ついに けり

とものくもあつてや ちの 枯尾花
りけり ちの 移り ちの 移り ちの 移り
小町の 画額

ちの 移り ちの 移り ちの 移り ちの 移り
早菰の 土の
本松の ちの 移り ちの 移り ちの 移り

深川大橋 半の ちの 移り ちの 移り
初 ちの 移り ちの 移り ちの 移り 橋の上

初雪や ちの 移り ちの 移り ちの 移り
竹の 画額

ちの 移り ちの 移り ちの 移り ちの 移り
初雪の ちの 移り ちの 移り ちの 移り

初雪の ちの 移り ちの 移り ちの 移り
深川大橋 半の ちの 移り ちの 移り

ちの 移り ちの 移り ちの 移り ちの 移り
初雪の ちの 移り ちの 移り ちの 移り

初雪の ちの 移り ちの 移り ちの 移り
初雪の ちの 移り ちの 移り ちの 移り

杜少陵詩

25

古く代々より

雲のうらみ

少年をくもく人々射す

生羽翼能

貞徳翁の銘

十二月九日一井亭

かゝ能く世々の瘦れ寒の井
肉花の露より減らん年々入
からせういふ所の秋のかいつく
事とれぬと見えう字難と見えう

自好歳

あゝふんは数千年も入ふ世の春

画譜

ゆく事やゆゑ親けしねく
うら（と）事ふ人や古曆
年とれ三人ふとく空舞う
煤探やそのゆく言のさうさ
年の市路ふいふもくやふ

月夜へのさうさ（と）事のうた
旅のうた（と）や海老のうた（と）

旅り

煤掃の秋の木下は風うき
うき（と）おのれの棚つゝ大工うた

常言の句

古体（と）や節の秋（と）年々の
ぬき人（と）秋（と）年々の
何（と）は（と）秋（と）年々の

五言（と）元服の秋（と）
ま（と）ま（と）ま（と）ま（と）

七下九

半々半々

人年家もたつて来り来り航

通ふわゝ路ハ——と手のうれ
 ゆゑ手やとちうと欠くよ梅の花
 ちうのほろと手やとちうときけん
 塔のいけるかぬと手やとちう

昔季にも聲めぬふ出立可ふ
ふふ付座なさう来ぬ聲
ふふ三十九の餅の音

海濱の草を煮て、葉を焙じて
江戸の浦の年々、物や葉一朶
をれく、餅を餅け、ひひひ
みみみ、二尺の七五三を煮の草

号季之叔

加々多六柿齋後之落筆也

新ふきき 海松 高き けしき 浪
瀬の なみだ けしき けしき

月夜 けしき けしき けしき けしき

貞徳宗徳寺武蔵画像

三つ けしき けしき けしき けしき
あき けしき けしき けしき けしき
えき けしき けしき けしき けしき

月夜 けしき けしき けしき けしき

題名生

此 植 けしき けしき けしき 木 けしき

四山の けしき

物 けしき けしき けしき けしき けしき

布袋画像

もの けしき けしき けしき けしき けしき

考徳

越の新徳

海 けしき けしき けしき けしき けしき
あき けしき けしき けしき けしき
えき けしき けしき けしき けしき

画像

けしき けしき けしき けしき けしき
けしき けしき けしき けしき けしき

わが絵画演とゆれお新正のあまふ岸
餅の花やかさささささささささ
大事のあめさみさみさ
梅干さうささささささ
幸崎和南
琵琶の池さささささ
粟津晴風
ささささ人のささささ
夫橋胸帆
夕ささみささの池を帆のあめ
比良ささ
ささささ白さささささ
三十一

石山秋月
はやさぬさささささ
あさささ
ささささささ
望月ささ
ささささささ
三井悦隆
右八景八景のあめさ
九のささささ
深川のさささ

地味よりいふまでもなくの行跡とて
いひけん人がいふ受けるはあつたといふ
ある

案の戸より案を市集うくあつたといふ
消息

三十里尾張大根のときいふこれ
画勢

たのむよりいふ海よりあつたの残
けい案より案よりいふあつたの案
案よりいふ

深川や根よりいふ案よりいふ
深川よりいふ案よりいふ

あつた案よりいふ案よりいふ
あつた案よりいふ案よりいふ



